

作家の私語りには、一体どれだけの真実が含まれるのだろうか。坂東眞砂子「わたし」は二〇〇二年に刊行された自伝（私語り）である。板東は伝奇的な設定で濃密な性と人の業を描くことに定評があり、直木賞を始めとし、多くの文学賞を受賞した作家であるが、二〇〇六年に「子猫殺し」という衝撃的なエッセイを書いたことでも有名である。親交のあった東野圭吾は追悼文において、板東は本当は崖から子猫を突き落としたのではないと記している。^注 そうだとすれば、板東は自らの主張を語る手段として、自身を偽悪的に誇張する傾向があるとも言えよう。「わたし」の冒頭は（これは人でなしの日記、犯罪の記録である）と始まっており、挑戦的・扇情的な書き出しである。そこから誇張されたものを幾分差し引いてみなければ、作家の術中に嵌まってしまっただろう。本稿では、「わたし」における挑戦的な語りの奥に隠された私語りの内奥を探ってみよう。

「わたし」に入る前に、板東の文学性の変化を確認する。それは「わたし」が板東の迷走期に描かれたと捉えられるからである。私に坂東の文学的流れを四期に分けてみる。一期はホラー小説で脚光を浴びた時から直木賞「山妣」を書いた時期である（一九九二―一九九六）。「死国」「狗神」「桜雨」「桃色浄土」など代表作が多く書かれ、直木賞「山妣」で一つの頂点を迎える。二期はイタリヤ・タヒチへ移住後から柴田錬三郎賞「曼荼羅道」を書いた時期である（一九九六後半―二〇〇二）。直木賞を一つの区切りとし、板東はイタリヤ・タヒチでの生活を選

び、「曼荼羅道」のほか「道祖土家の猿嫁」、「葛橋」「神祭」、紀行文などを発表している。「曼荼羅道」で一つのピークを迎えたのだが、この後、板東は停滞・迷走とも呼べる三期に入る（二〇〇二―二〇〇六）。この時期は代表作と呼べる長編が少なく、官能小説が多い。私語りの「わたし」はこの時期に書かれている。停滞の末、「子猫殺し」のエッセイを発表し、大きな騒動となる。この時期の板東の文学的活動は迷走とも呼べる。四期は「子猫殺し」騒動から死去までである（二〇〇七―二〇一四）。騒動の後、高知に戻り、板東の作風は歴史幻想小説へ変化する。江戸時代の高知の狗神騒動（鬼人の狂乱）や北条時頼（傀儡）、持統天皇（朱鳥の陵）らの世界を業深い人間の有り様という板東色を全面に描き出して、長編作家として復活した。これを見ると、「わたし」も「子猫殺し」も板東が自身の文学を発展させることができずにもがいていた時期のものであり、偽悪的・挑戦的な態度は、そういった苛立ちと無関係とは思えない。

「わたし」の内容を一言で言えば、「思春期」から抜け出せない女性の苦悶と言える。多くの人は、悩みながら《思春期》を送り、そこで苦しんだ後大人になってゆく。しかし、わたしは《思春期》独特の苛立ち、つまり自分以外の全ての外界に対する怒りが激しく、現在においても全てに対して闘争的か、無関心かのどちらかの態度を持ち続けている。時間軸は大学受験時から幼児期までを遡る形式が基本となり、間に現在の恋人（正確に言えば妻子ある人）ジャンクロードとのタヒチでの生活が挿入される。そして描かれる主題はⅠ《祖母コンプレックス》、Ⅱ人生に対しての《不感症》の二つが絡み合っている。

「わたし」の最も重要な軸はⅠ《祖母コンプレックス》である。冒頭では痴呆症の祖母に対して「早く死んでくれればいい。そしたら、もうこんな生ける屍は見なくてすむ」、（やっとなんでくれた）と考えており、自分がいかに（人でなし）であるかが強調される。しかし、この歪みの原因は幼い頃最も愛していた祖母と引き裂かれ

たことに端を発し、後半にそれが明らかになる構成となっている。わたしは小学校低学年まで、祖母と一緒に寝ていた。〈祖母の乳房をつかみ、吸っていると、わたしは安心した。それは眠りに落ちる前の至福の時だった。祖母は、わたしに優しい愛撫と乳房を与えてくれる母だった〉。ある日、母から祖母と眠ることを禁じられる。母も幼い頃自身の祖母の乳を吸って寝ていたが、それは本来の母がいなかったための代理であった。〈母は、わたしが祖母の乳を吸っていることの意味を知っていたはずだ。それは、わたしには母がいらない、ということだ。母にとってはたまらないことだったろう。母は同じ屋根の下にいるのに、娘のわたしにとっては母はいない、わたしの母は、祖母であるということを示していた〉。更に〈孫娘が祖母の乳首を吸うという行為に、近親相姦めいた淫靡なものを感じて、毛嫌いしたのかもしれない〉と述べている。近親相姦は板東作品の重要なモチーフだが〔「狗神」「山姥」、当事者たちは「近親相姦をして何が悪い」と反撥する。それは板東の原体験、祖母と孫娘の性愛的な結びつきと深く関わるものである。《母》と引き裂かれ、その後本来の母とも関係を見出せないわたしは、自らを自らの母とする。〈わたしは、それまでの母である祖母を棄てた。我が子によって姥棄て山に送られた祖母は、痴呆症の淵に身を沈めていった。／こうして長い年月をかけた祖母の埋葬が始まったのだ〉。「わたし」の単行本は祖母の写真で飾られている。この時の祖母は四十歳であり、執筆時の板東と重なる。末尾に向けて、祖母と自らの共通点を挙げる描写が多くなる。「わたし」という作品は、板東がどれだけ祖母を愛していたかを表す鎮魂の書と言える。現実の別れにおいてできなかった、板東流の祖母への愛の表明なのだろう。

次に重要な軸はⅡ人生に対する〈不感症〉である。ジャンクロードによって指摘された〈不感症〉は、わたしの人生に対する態度そのものだった。《母》と引き裂かれたわたしは、人との関係を構築できない。父は小さな〈天皇〉で、母は自分を見ることのない存在、姉と妹は人に愛される術を持っており、わたしは大家族の中でい

つも孤独を感じ、自分と外界との間に壁を作っていた。わたしの人との接し方は〈憎む〉〈殺す〉という二種類しかない。〈わたしは人が怖い〉、〈人は、無言のうちに、わたしに、ああしろ、こうしろ、と命じてくる。それがたまらない〉ため〈憎む〉。愛するジャンクロードに対しても〈わたしに最も近づいて来た人であるがゆえに、わたしは「人」に対する憎しみの集中砲火を浴びせる〉。今一つは〈殺す〉ことである。〈わたしは母を殺したのだ。心の中で、ひっそりと。わたしは祖母を棺桶に押しこめ、母を殺した。それから、誰彼の見境なく人を殺しはじめた〉。ここでの〈殺す〉とは、自分の世界にその人の存在を認めないという意味で使われている。冒頭に〈殺人者の記録〉とあるのは、わたしがいままで意識の中で多くの人を葬ってきたことを表している。

「わたし」には坂東真砂子その人の不器用さが現れている。愛する祖母と引き裂かれたことにより、人との関係を築くことができず、攻撃的か無関心（殺す）かの態度で生きてきた。それは自己肯定感の不足による、不器用な愛の渴望の姿である。その姿は理解できるのだが、「わたし」そのものに共感することには躊躇してしまう。例えば、同じく人間のエゴイズムを描いた「人間失格」では、ユーモアの場面があったり、何よりも読者を引きずり込み、少なくない数の人間をシンクロさせてしまう恐るべき力がある。板東の「わたし」は、「この不器用な私を理解して！」という強い訴えは感じられるが、あくまでも自分本位である。更に描かれる思いが強烈な攻撃性と近親相姦的な祖母への愛という性質であるので、共感できる人が限られると思われる。「わたし」は、自らの文学を発展させることができずもがいていた板東の原点探しの作品であるが、広く一般性を獲得するには力不足であることは否めない。板東の迷走はこの後数年続くことになる。

（広島国際大学非常勤講師）